

## 1 「身体の欲望」と「生命の欲望」

無痛文明をつき動かしているのは、「身体の欲望」である。「身体の欲望」とは、苦しみを避け、快を求め、いまの快適な枠組みを維持し、すきあらば増殖しようとする欲望だ。

ところで、人間の奥底には、もうひとつの欲望がうごめいている。

それは「生命の欲望」である。

「生命の欲望」とは、「身体の欲望」を超出しようとする欲望だ。身体の欲望が死守しようとする「枠組み」を、つねに超え出ようとする欲望だ。「身体の欲望」が、苦しみを避け、快を求め、いまの快適な枠組みを維持し、すきあらば増殖しようとするものであるのに対し、「生命の欲望」とは、それとは逆に、苦しみを前向きにくぐり抜けることを通して、いまの自分の枠組みを解体し、所有物を捨て去る方向へと自己を変容してゆこうとする欲望である。みずからを解体させながら、まったく未知の世界へと自分を開いてゆこうとする欲望である。「生命の欲望」は、無痛文明をその内側から解体させる潜在力を持っている。

本章では、この「生命の欲望」の可能性を、徹底的に掘り下げて考えてみたい。

「身体の欲望」と「生命の欲望」は、まったく異なっているように見えるが、実は、そうでもない。「身体の欲望」の流れでゆく先を、ほんの少し操作して、別の水路へと導いてやれば、いつのまにかそれは流れる向きを変え、知らず知らずのうちに「生命の欲望」へと変換されてしまう。このような作業のことを「転轍」と呼ぶ。

機関車が一本の線路を全速力で走っている。その機関車は、東へ東へと向かおうとしている。もし、次の駅で、この線路と並行して走るもう一本の線路へと、誰かが連結を切り替えてしまったら、何が起きるのだろうか。機関車はその駅を猛スピードで通過するのだが、気がつかないあいだに、いままで走っていたのとはまったく異なった線路へと誘導されてしまう。新しい線路は、最初は同じく東に向かって進んでいるのだが、いつのまにか大きく迂回して、まったく逆方向へと向かうようになっていく。機関車はスピードを落とすことなく、進行方向を巧妙に変えられてしまったのである。

転轍とは、このような線路の切り替え作業のことだ。走っていく機関車の推進力はとてつもなく大きいので、いきなり線路の正面に立ちふさがって機関車を止めることはできない。だが、転轍作業を行なえば、機関車の推進力を利用したままで、路線だけを

変更させ、ゆつくりと機関車の進行方向を変えていくことができ  
る。相手の力をそのまま利用して、いつのまにか行き先を変えて  
しまうというのが、転轍の極意だ。ここでいう機関車は、「身体  
の欲望」のことである。

身体の欲望を生命の欲望へと転轍することが可能なのは、両者  
の本質が、ともに欲望だからだ。前進しようとする方向はまった  
く逆なのだけれども、もつと先へとみずからを進めてゆこうとす  
る勢いは共有しているのだ。この、「もつと先へとみずからを進  
めてゆこうとする勢い」は、肯定されるべきである。欲望の流れ  
る方向を、枠組みを維持したまま所有物を増やす方向から、枠組  
みを前向きに解体して自己変容する方向へと誘導してやれば、身  
体の欲望はいつのまにか生命の欲望へと変質しているはずであ  
る。残された問題は、どのような手法を用いればこの変換が可能  
になるかということだ。

転轍を行なうためには、まず、身体の欲望と正面から対決する  
ことが必要だ。これによって、身体の欲望の流れに、最初の一撃  
を与える。次に、身体の欲望を言葉巧みに誘惑し、別の水路へと  
巧妙に誘導してこなければならぬ。そして最後に、身体の欲望  
を新しい水路へと固定する。身体の欲望は、われわれの奥底から  
立ち上がってくるのであるから、身体の欲望の転轍は、「自己と

の対話」という形をとることになる。自己と対決し、自己を誘惑し、新たな自己を固定するのである。

次節以降で、身体の欲望の五つの特徴、すなわち「快を求め苦痛を避ける」「現状維持と安定を図る」「すぎあらば拡大増殖する」「他人を犠牲にする」「人生・生命・自然を管理する」の五つの特徴をひとつずつ検討し、そこから立ち現われてくる「生命の欲望」の具体的な姿をじっくりと探ってゆきたい。

（書籍版に続く・・・）